5月7日　ヨハネによる福音書15章12～17節　今日の説教から
説教題：「友として歩むために」

今日の聖書個所では、イエス様は私たちのことを僕・奴隷ではなく、「友」と呼んでくれています。私たちと神様の関係は奴隷と主人ではない、そのように説明するイエス様は、その理由として「僕は主人が何をしているか知らないからである」と説明します。

僕は主人が何をしているかわからない、それに対してキリスト者は、今私たちは神様が何をしているのか、何をしたいのかをすでにイエス様に教えられています。それも、「父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせた」とイエス様が言うほどに、私たちに必要なことは全て教えられているのです。それは間違いなく、神様が私たちのことを愛してくれているという大きな恵みの事実と、その神様の言葉に従うべきであるという信仰の言葉、他にも神様の御心を実現するべく与えられたすべての言葉の事を指しているのでしょう。

私たちのことを友と呼んでくれるイエス様は、私たちのために命を捨てて、その命によって私たちの罪をあがなってくれた方であります。私たちのために、私たちを愛し抜いて、その命のすべてを十字架に捧げたのが、イエス様なのです。自分を何よりも優先するのではなく、相手が喜ぶことを相手のために行う、それこそが「自分を愛するように隣人を愛しなさい」とイエス様から教えられていることなのです。

今日の聖書個所でイエス様が私たちに語りかける、「互いに愛し合いなさい」という命令、その言葉によって、私たちは兄弟姉妹と、隣人たちと愛し合うことが信仰の上での義務として、必要不可欠な行いとして課せられています。愛するという言葉は、私たちはそれを「相手を大切にする」「相手を思いやる」という言葉に置き換えることが出来ると思います。それは決して心の中だけで思えば十分なのではなく、実際に行動に起こす必要があるものであり、自分の大切なものを与えることを意味します。この「与える」ということは、物質的なものだけではありません。もちろん相手が必要な「物」を与えることも愛ですが、例えば労力や時間を割くことも、私たちが行うことの出来る「愛の業」なのでだと思います。

その人のことを思い、その人のために時間を惜しまなくなれば、もはやその人は私たちの友なのです。その友の中でも、最も大きなものを惜しまずに私たちのために使ってくれたのが、私たちの主であり、私たちが友と呼ぶことをゆるしてくれた、イエス様なのです。イエス様は、私たちのためにその命を使い切って、この世での命をすべて燃やし切って、私たちを救いへと導いてくれた方です。その命を十字架へと運び、神様の御心の実現のために捧げ尽くしました。イエス様は、「私たちのために」十字架にかかったのです。だからこそ、イエス様は私たちの主でありながら、私たちが信じる神・子なる神でありながら、私たちの友でもあるのです。

私たちのために死なれたという事実に「もったいない」という言葉が漏れるほどに、それほどのものをイエス様は私たちに与えてくれました。私たちが友であるから、同じ神様の子として、兄弟姉妹として、惜しみなく愛を与えてくれているのです。そのイエス様の愛に対して、私たちは何を返すことが出来るのでしょうか。何を返すことが出来れば、私たちはイエス様の友であると、胸を張って生きることが出来るのでしょうか。

イエス様の愛の大きさは、私たちがなにをしたからといって、返し切れるわけではありません。ただ、私たちも、誰かの友になることは出来るのです。イエス様と同じように、どんな人とも寄り添って歩むことが出来ます。そのことを、イエス様から期待されているのです。イエス様の友として歩むためにも、イエス様が友と呼んだ一人一人と共に歩むためにも、神様の御言葉の中で歩み続けていきましょう。

今日の説教箇所：ヨハネによる福音書 15 章 12～17 節

- 12:わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。」